２０２４年度　ソニー幼児教育支援プログラム

雨から繋がる３歳児の科学する心の循環

～家庭との繋がりから育まれる科学する心～

学校法人七松学園

認定こども園　七松幼稚園

目次

はじめに・・P1
① 本園の研究の取り組みにあたって
② 今年度の研究について
③ 本園で考える科学する心
④ クラスの様子

事例１　◎3 歳児・雨遊びとの出会い　～突然雨が降ってきた・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P2

事例２　◎3 歳児・やってみたいが深まる～昨日の絵の具はどうなっている？・・・・・・・・・・・・・・P3

事例３　◎3 歳児・雨から空へ興味が広がる～どうして雨が降らないのだろう？・・・・・・・・・・・・・P4

事例４　◎3 歳児・自分だけの傘を作ろう～傘を作って空に見せるのはどう？・・・・・・・・・・・・・・P6

事例５　◎3 歳児・感触遊びから広がる活動～水溜まりを触って感じたこと・・・・・・・・・・・・・・・P8

本論文のまとめと課題 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P11
① 本実践から見られた科学する心の循環
② 科学する心の循環を支える家庭との繋がり
③ 子どもから働きかける科学する心の循環の家庭との繋がり
④ 課題

はじめに

①本園の研究の取り組みにあたって

学校法人七松学園認定こども園七松幼稚園は、昭和 28 年に創立され、これまで兵庫県尼崎市で幼児教育を実践してきた。2016 年度より幼保連携型の認定こども園として 0 歳～5 歳に対して教育及び保育を行っている。

これまで子ども達の心の動き方、成長に気づいて活動を論文にまとめるということで、子ども達の活動が子ども達自身によって広がり、深めていく過程における「科学する心」を捉えてきた。保育者はあくまでも子ども達のサポートであることを改めて認識し、タブレットや大型ディスプレイ等 ICT 機器を使用して、活動後には子ども達と楽しかったこと、面白かったことを共有している。それは保育後に保育者間でも共有することで、保育の面白さ、感動を分かち合える大切な時間となっている。本園の教育保育理念に「愛情を持って一人ひとりの個性を尊重する」「豊かな心を育む」「様々な出会いの中で生きる力を育てる」とある。

②今年度の研究について

2021 年から図 1 のように子どもが様々な人との繋がりの中で生まれる科学する心に着目している。2022 年は図 2 のように園を長時間利用している子どもの養護の側面から教育に繋がっていく 2 ～3 歳の成長の中で保育者が仲介しての科学する心の広がり、2023 年は 5 歳児が他の人と繋がる「人と人の繋がり」から友達、保育者、異年齢でのユニット活動、家庭との繋がり、科学する心がどのように育まれるのかを探った。コロナ禍を経て、3 歳から入園してくる子どもの科学する心がどのように育まれるか、また 5 歳児と違った形で人と繋がる様子については未だ探っていなかった。

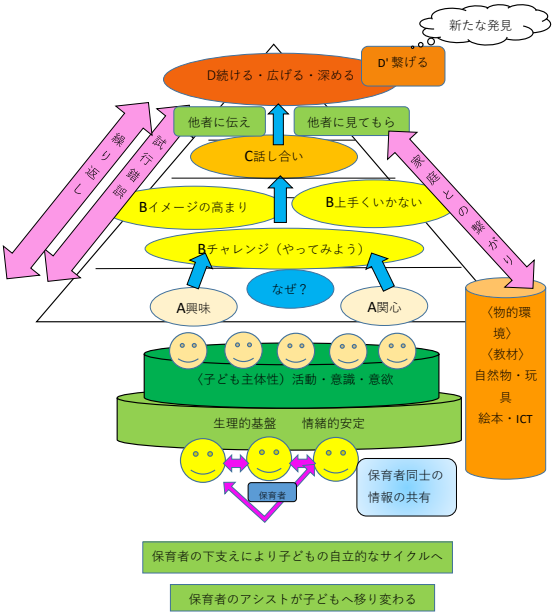


図 1　2021 年 2023 年で基にした、5 歳の科学する心の図

図 2　2022 年で基にした、2 ～3 歳にかけての科学する心の図

そこで今年度は 3 歳児の日頃の保育活動から、一年間の子ども達の声と、保護者の声も拾いながら、保護者の方に発表するこころまつり、日頃の活動の過程を見てもらうてづくりまつりに繋がる中で、家庭との繋がりを中心に科学する心を捉えていく。無限に広がる子ども達の発想、活動と活動が繋がる思いから、子ども達の科学する心がどのように芽生えるのかを探る。

③本園で考える科学する心

科学する心は、図２のように生理的基盤・情緒的安定が保証された中で信頼できる保育者や友だちと心地よく過ごすことが前提のもと、日々様々な事象に五感を通して触れ、興味・関心をもち、A やってみる→B 不思議→C 気づき→D 好奇心の一方向へのサイクルで科学する心が育まれる。また、一方向ではなく、図２のように双方向に作用する場合もあることがわかった。2 歳児での様々な E 体験が 3 歳児でより豊かな経験（A やってみる⇔B 不思議⇔C 気づき⇔D 好奇心）に繋がる。さらに一つ一つの体験に触れ、積み重ねていく中で、一つの点として存在していた E 体験と E 体験が線となって繋がる過程の中で科学する心が芽生え育まれていきながら、遊びが発展し、E 体験が豊かになったことで経験の幅が太くなり広がることで成長していくことがわかった。

科学する心の基盤づくりを基に、科学する心の循環を繰り返すことによって、図１へと繋がり４歳児・５歳児の科学する心へと繋がると考えられる。3 歳児の子ども達は、言葉で表現することや言葉で伝え合うことの難しい発達段階であることを踏まえながら、考察していく。また、保育者は保護者との繋がりの中で科学する心についても捉える。

④クラスの様子

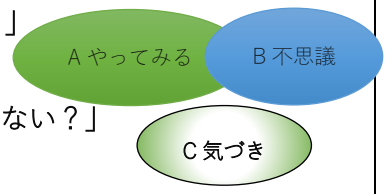
入園してから、自分の好きな遊びやしたいことが明確な子どももいれば、新しい環境に慣れずに保育者と一緒に遊ぶ子どももいた。子ども達の興味関心を引き出すためにも部屋でのコーナー遊びを充実させ、子ども達の様子を見ながら、ままごと、絵の具のコーナーや ICT を使える場所等、様々なコーナーを設定し、子どもの自主性や創造性を育めるように考えた。友達同士の関わりより、対保育者の子どもが多く見られる。ユニット活動も盛んで、年齢の違う子どもと活動を共にすることもある。

事例１　◎3 歳児・雨遊びとの出会い　～突然雨が降ってきた（令和５年６月～）

今日は園庭で思い切り遊ぼう！という日。部屋では登園してきた子どもから自由遊びができる環境を設置し、絵の具のコーナーで遊んでいる子どもが「まだ絵の具をしたい」というので部屋でのコーナーを園庭に持っていき、園庭でも絵の具コーナーを設置した。絵の具遊びをしたい子どもがコーナーに集まり絵の具遊びを自由にしていた。

するとポツポツと雨が降ってきたので、保育者が急いで片付けを促した。

保育者「雨が降ってきたから急いで片付けよう！」
Y 児「まだやりたかった」
S 児「このまま雨に濡らしてみたら面白いんじゃない？」
保育者「面白そう！」



子どもが描いた模造紙を雨に濡らしてみたら面白いのではないかと提案してきたことで、絵の具で描いた模造紙を濡らすことになった。部屋に戻ってから絵の具が、これからどうなっていくのか話をしてみると子ども達からは、「色が混ざる」「絵の具が消える」等不思議さを感じる様々な意見が出た。雨が降っている中も濡らしている模造紙の観察をしに行き、雨による色の変化に気づく子ども達の姿が伺えた。

写真１　絵の具遊びをしている様子

写真２　雨が降っている中、模造紙がどのようになっているのかを見ている様子

《子どもの科学する心》初めは園庭での絵の具遊びを楽しんだが、雨が降ってきたことによって「濡れるとどうなるのか」という「A やってみる」という姿から「B 不思議」「C 気づき」といった科学する心に繋がっていった。

《考察》「濡らしてみたら面白そう」と提案したＳ児のやってみたいという気持ちに周りも共感し、どうなるのかという結果を一緒に楽しみにすることで遊びを広げることができた。このことから、やってみたいことを実現することで自信に繋がり、自分の気持ちを伝えようとする自己表現ができるようになると考えられる。

《保育者の科学する心》園庭での絵の具遊び中にたまたま雨が降ってきたことで、急いで片付けなければという保育者の思いとは逆の子どもの発想に驚かされた。また、保育に対する柔軟な考えができるように様々な視点を持ち、子ども達が考えている世界が面白くより子ども達の発想に保育者が子どもと共に興味を沸かせることが保育者の科学する心になると考えられる。

事例２　◎3 歳児・やってみたいが深まる　～昨日の絵の具はどうなっている？（令和５年６月～）

次の日、子ども達は登園するなり一番に、雨に濡らした絵の具で描いた模造紙が気になる様子。登園してきた順に、濡らしていた模造紙を見にいくと

Ｙ児「わぁ！綺麗！」

Ｈ児「汚くなった、破れそう！」

Ｓ児「本当だ、破れそう…」

Ｃ気づき

などと感想は様々であった。雨に濡れる様子を保育者がタブレットを用いて撮影していたので、部屋で動画を見てみた。すると雨の“音”に気付き**「ポタポタ」「ザーザー」**等言葉にして表現してみたり、雨で濡れた部分が**「白くなっている！」**と気づいたりする姿があった。

昨日の経験から、**「他にも何か雨に濡らしてみたい」**という意見が出たので、廃材倉庫を子ども達と見に行った。そこで、長細いリボンがあったので色付けをして雨に濡らしてみることになった。前回は絵の具を使用したので、今回は何を使ってみるか子ども達に聞いたところマーカー（水性ペン）を使用するとの声が上がったのでマーカーを使って色付けをした。

「雨に濡らしたい」という思いから雨が降るのを心待ちにして、毎日保護者と天気予報を確認して登園してくる子どもが出てきた。

１週間ぶりに待ちに待っていた雨が降ってきた。

家庭との繋がり

Ｓ児「先生！雨が降ってきた！」

Ｋ児「早くリボンを用意しよう！」

Ｄ好奇心

Ａ児「色が滲んでいる！」

Ｔ児「ポタポタ落ちている水に色がついている」

雨が降るのを心待ちにしていた子ども達は、大喜びだった。すると、落ちてくる滴に色がついていることに気付く子どもがいたので見えやすいように下に紙を敷いた。マーカーで色付けしたリボンは綺麗に滲んで色が混ざっていき、子ども達はやっと滲ませることができてとても喜んでいた。

写真３　動画と実物を見ている様子

写真４　リボンに色付けをする

写真５　リボンを見えやすいようにコーンバーに設置して雨に濡れる様子を観察

（保護者からの声）
「毎日、天気予報を聞いては雨が降るのを楽しみにしています」

《子どもの科学する心》事例１の経験から、雨が降ったことがきっかけで“違うものも雨に濡らしてみたい”すると“どうなるのか？”という過程から多くの「Ｂ気づき」生まれた。さらに、子ども達１人１人の気づきから、やってみて、もっと不思議なことを見てみたいという思いから「家庭での保護者とのやり取り」が生まれて、

「C 好奇心」に繋がっている。

《考察》子ども達が毎日天気予報を確認して登園してくる姿から、家庭との連携が生まれていると考えられる。その家庭との連携から、保護者の支えにより子どもの好奇心がさらに育まれて、新たな発想が生まれたと考えられる。子ども達は、絵の具の経験をしたため、次は違うものでやってみたいと感じ、興味を持っているからこそ“滴に色がついている”ことにも気づくことができたと考えられる。

《保育者の科学する心》雨が降ったから活動が終わりではなく、子どもの発想から活動は無限に広がると伺えた。さらに、子どもの好奇心がより育まれるように、子どもや、保護者に伝える記録を通じて、家庭との連携も意識することが大切と思われる。そして、保育者が、保護者の支えにより子ども達の声からやりたいことができる環境を整えていくことも、保育者の科学する心に繋がると考えられる。

事例３　◎3 歳児・雨から空へ興味が広がる　～どうして雨が降らないのだろう？（令和５年９月～）

夏休みが終わり、二学期が始まった。子ども達は一学期に経験した雨の遊びをよく覚えていて、次の活動に向けて話し合いをした。

保育者「雨が降ったら何をして遊ぶ？」
H 児「傘をさして散歩をしたい！」
Y 児「やりたい！やりたい！」

D 好奇心

という意見で盛り上がった。

夏休み中にてるてる坊主を逆さにしていたと保護者の方からの声もあり、毎日家庭から天気予報を確認して、知らせてくれるのが定番になっている。

家庭との繋がり

しかしなかなか雨が降らない。雨を待つ日が増え、雨が降る時の空や雲はどんな色をしているのか、空や雲の絵本を読んだり、屋上へ行って雲を観察したりする日が増えた。雲の動きが早いことや、飛行機がよく飛んでいることに気づいて、飛行機に手を振ったり、友達と「あれが羊雲！」等と雲の名前を言い合ったりして遊ぶ様子が伺えた。さらに空を見ていると青色（ANA）や赤いマークの（JAL）等、違う種類の飛行機が飛んでいることを知った子どもが、「写真を撮りたい」とタブレットを貸してほしいとの要求があった。

年長児、年中児や預かり保育の子ども達には、子ども専用のタブレットがあり、色々なものを撮影して印刷していたため、使い方を知っている子ども達。年上のお友達の使っている姿をユニット活動で既に知っているので、早速飛行機や雲を撮影し始めた。

撮影した飛行機の写真と、部屋にある乗り物の図鑑を見比べて、「こっちが ANA で、こっちが JAL」と飛行機の種類を認識する姿があった。また、絵本から、飛行機雲があると、雨が降りやすいということを知る。そこで雨が降る前には飛行機雲ができやすいということや羊雲、薄雲などの雲の名称を絵本から知った。子ども達からは、飛行機ももっと近くで見たいため、空港近くのスカイパークまで園外保育に行く活動にも繋がった。子ども達にとっては、スカイ

写真６　話し合いの様子

写真 7　雲の写真を取る様子

写真 8　スカイパークでの様子

パークに行く前後にも家庭でのやり取りが多くあったようで、保護者からの声にあるように雲の話題も含めて様々な好奇心を育む活動に繋がった。

（保護者からの声）
「スカイパークに行く前には、タイミング良く空や雲、飛行機に興味をもった後であった為、スカイパークを楽しみにして、どんなところか家庭で、画像や映像を見て期待を高めて、調べていく姿がありました。
園で見た図鑑で、飛行機の種類を覚えたと教えてくれる姿もありました。
スカイパークに行った後には、まだまだ遊びたくて園外保育後、その週末にスカイパークに家族でまた行きました。その時に、飛行機はもちろん、雲の名前も教えてくれました。」

写真 9　スカイパークへ行った後の話し合いの様子

また、週末に雨が降る日が続き、子ども達が幼稚園にいるときに雨が降ることがなかった。毎日天気予報を見てくる子どもも、
A 児「またずっと晴れって言っていた」
と残念そうに言う姿があった。
B 児「どうして雨が降らないの」
H 児「早く雨が降ってほしいなあ」
Y 児「雨が降ったら、傘を持ってみんなでお散歩をしたいのに」
という子どもの声があったが、なかなか実現できない日が続く。しかし、右のように週末に雨が降った際にはお家の人と傘を持って長靴を履いて散歩をしていると保護者の方数名から話を聞いた。

（保護者からの声）
「休みの日に雨が降ると、カッパを着て傘を持って“雨散歩”をしています」

家庭との繋がり

話し合いの活動の際、雨の中散歩をした子どもに、雨の中の散歩はどうだったか聞いてみると
A 児「ポツポツって音が聞こえた」
B 児「地面が濡れていて、水溜りに長靴で入った」
Y 児「楽しかった」
等と話してくれた。その話を聞いて、他の子どもも家庭での“雨散歩”が増えた。

《子どもの科学する心》雨がなかなか降らないことで、どうして雨が降らないのかが気になる。雨が降る時には空が暗くなること、雲が多くなること等、絵本からどんどん知識が増えていった。屋上で空を観察してみることで、雲の動きや飛行機に興味が広がり、雲の名称や飛行機の名称などに詳しくなった。子ども自身の好奇心が育まれたことにより、年上の子ども達が使っているタブレットを同じように使って記録したいという思いや、園外保育でスカイパークに行った経験、園外保育後にも保護者と共に同じ場所に行くような姿が見られ、ABCD の科学する心の育まれる循環を子ども自らが保護者と共に行っている姿もみられた。さらに、晴れた日だけでなく、雨の日においても科学する心の育まれる循環が生まれ、好奇心を持って敢えて、いつ雨が降るのか？また、雨の時、外に出てどんな雲ができるのか？等、ただ雨を待つ時間ではなく、雨が降らないからこそ空、雲へと子ども達の好奇心が広がっていった。
《考察》子ども達の気持ちを詳しく知るためや、友達の意見に耳を傾けられるようにするために話し合い活動を行った。その日々の経験が、友達同士で ABCD の科学する心が育まれる循環が生まれ、その雰囲気がクラス

の中で出来たと考えられる。また、空を飛ぶ飛行機と雲が関連することで園外保育に行く意欲も高まり、雲×飛行機での好奇心が育まれただけでなく、家庭の支えもあり、一層、科学する心の育まれる循環が起こったと考えられる。年上の子ども達の使っているタブレットを使うことも、自分達で決めて、空の様子を記録する等、年上の子ども達の活動も自分達の活動に取り入れられている。昨年は５歳児の視点から異年齢での年下の子どもとの関わりから科学する心の循環があったが、今回は逆の視点からもみられた。さらに園外保育をきっかけに、子ども達の中で雨を楽しみにする気持ちは日に日に高まり、毎日空を見上げるうちに天気予報や空に好奇心が広がり、雨散歩を家庭で行う声が保護者から聞こえ始めるようになった。園内外での活動と保護者の支えにより切れ目なく循環していると考えられる。

《保育者の科学する心》園庭で遊んでいる最中でも飛行機が飛んでいると子どもが「飛行機！」と叫び、他児が「本当だ！」と反応する姿を見て、子どもの興味が友達から友達へ広がっている様子が伺え、友達との対話などやりとりを通して雨が降らない時間も遊びを共有し、タブレットで記録すること等を通して、気づきや好奇心が広がり科学する心が循環することが伺える。そして、園外保育でもこの科学する心が育つきっかけがさらに広がったと思われる。保護者も同じように雲×飛行機という子どもと共に持った好奇心から園外保育だけでなく、事後で家庭と繋がることもできた。また、雨散歩に関する声も聞こえ始め家庭との繋がりを一層聞くこととなる。こういった家庭との繋がりについても保育者が繋がりを知ることによる科学する心の循環を、子どもが真ん中で、園×家庭という関係性が、保育者の科学する心に繋がると考えられる。

事例４　◎3 歳児・自分だけの傘を作ろう　～傘を作って空に見せるのはどう？（令和５年１０月～）

なかなか雨が降らないため子ども達と、どうしたら雨が降るのか考えた。

どうして雨が降らないのかを話し合うことになった。早く雨が降らないかなぁという想いから毎日空を見上げ、子ども達がタブレットを使用して撮った雲や飛行機の写真を印刷して、部屋に展示してみると、絵本と写真を比べてたりすることで、色々な話題が生まれてきた。

Ａやってみる

Ｓ児「傘を空に見せたら、空が見てくれて雨が降ってくれるかも？」

Ｍ児「傘は自分の傘を作ってみたい」

との声が上がったため傘を製作することになった。子ども達が自由に製作できるように傘の製作コーナーを設置した。中には自分なりにこだわりを見せ納得がいくまで３日間程模様を描きながら取り組む子どももいた。

写真 10　傘製作の様子

令和５年１１月１日、出来上がった傘を早速空に見せることに。

Ｓ児「空に近いところに行かなければならない」

Ａやってみる

Ｈ児「それなら屋上が一番空に近いよ！」

とのことで傘をさしながら屋上へ向かった。屋上ではみんなが**「雨よ、降れー！」**と叫びながら傘を高く空にみせる姿があり、雨が降ってほしい気持ちがどんどん高まった。傘をさして歩く姿を見て、隣のクラスであるユニットクラスの歳上の友達にも「素敵！」と褒めてもらえて第三者の感想から満足感を得た。

写真 11　傘を空に見せている様子

令和５年１１月６日念願の雨が朝から降った。子ども達は登園してくるなり

Ｙ児「やっと雨が降ってくれた！」

Ｓ児「傘を空に見せたからだ！」

Ａやってみる　Ｂ不思議　Ｃ気づき

T 児「やっと散歩ができる！」
と大喜びの様子だった。子ども達は「雨が降ったから散歩をしに行こう！」と張り切り、保育者は子ども達が作った傘を実際に使ってみても面白いかなと思ったが、
M 児「自分の傘は紙（画用紙）だから雨に濡れたらせっかく作った傘が潰れる」
H 児「模様が無くなってしまうかも」
Y 児「破れたらこころまつり（発表会）で見てもらえなくなるかも」
という声が子ども達から上がった。その為幼稚園の本物の傘をさして散歩に出発することになった。雨の“冷たさ”や“雨が傘に当たる音”に気づき、それぞれが雨の中の散歩を楽しんでいた。今まで、雨が降ると外では遊べなかった子ども達が、雨が降ったことによって外で遊び、様々な発見をする姿に実際に体験する面白さを感じることができた。

B 不思議

S 児「ポンポンと音が聞こえる！」
と滴が持っていたステンレスの皿に滴を当てて、音を聞くことに成功した。
M 児「本当に音が聞こえる！」
Y 児「私もやってみたい！」

C 気づき

と周りの友達が反応したことで S 児も得意げな様子であった。
令和５年１１月２８日、雨上がりの朝
Y 児「また園庭で雨の音を探しに行きたい」

D 好奇心

という雨の音探しにも繋がった。
こころまつりについての話し合い活動。こころまつりではクラスでテーマを決めて、表現遊びを保護者の方に見てもらうのにどんなテーマにするのか、どんなことを見てもらうのか話し合いをした。クラスで話し合いをした際に、子ども達の「見てもらいたい」の気持ちは、傘であったり、雨の中の生き物になりきったりすることであった。表現する生き物は、子どもが家庭から捕まえてきたカエルであったり、部屋で大きく育ったカタツムリであったり身近なものだった。
子ども達からは
E 児「作った傘を見てもらいたい」
Y 児「部屋で飼っているカエルやカタツムリに変身する」
「たくさん雨が降っていたから、動きをもっと大きくしたほうがいい」
等とたくさん雨の活動について関係する意見が出た。

子ども達の多くの意見をもとに、こころまつり（発表会）では、自分達の作った傘だけではなく、雨を喜んだ、自分達だけでなく、生き物の表現を交えつつ、体感した音も表現に加えることとなった。
こころまつりでは、子ども達発信で、雨のことで気づいたことを、保護者の方々に披露する活動となった。

家庭との繋がり

（保護者からの声）
「こころまつりで傘を見てね！と張り切っていました。」
「傘を空に見せたから、雨が降ってくれると言っていました。」
「やっと傘を持って散歩ができたと話していました。」

写真 12　木から落ちてくる滴を待っている様子

写真 13　滴が落ちそうな所を探す姿

写真 14　雨の時の表現遊びをする子ども達

写真 15　こころまつりで表現遊びを披露する様子

（保護者からの声）
「家で捕まえたカエルになるねんって喜んでいました」「みんなが、『Y ちゃんのカエル、雨で喜ぶからって言ってくれた』と話してくれました」、「傘が１番見てほしいねん、って言っていました」
「〇〇ちゃんはオレンジの傘やねんで～と、友達がどんな傘なのかほとんど覚えていることに驚きました」、「みんなで傘をもって散歩をしたって嬉しそうに教えてくれました。こころまつりで傘を使うって聞いていたので、こころまつりが楽しみです」、「家で好きなシーンを教えてくれました」（雷がなるところが１番面白いから楽しみにしてて！）

《子どもの科学する心》ファンタジーの中で、雨を降らせるための傘をつくってみる「やってみよう」という気持ち、また空の近くへ行くこと、そして雨が降ってきたことから破れてしまうという「気づき」にまで繋がっている。時間をかけこだわって傘を製作しただけに、他のクラスの友達、先生、そして保護者に見てもらうために大切にしようとする気持ちが、科学する心の循環の中に見られた。

さらに、実際に雨が降り、雨の中傘をさして散歩をした時、雨が何かに当たる音に気づいたことで、滴の音を聞いてみたい、探してみたいという好奇心が生まれている。子どもの「またやりたい」という「また」を実現することで、初めには気づけなかった「音」に気づけるようになった。滴の音を聞いてみたいという気持ちも、自分の体験から次はこうしようという発想が生まれて成功体験に繋がり、科学する心の循環となっている。

傘の素材を変えて、散歩するだけで、音にまで好奇心を深める活動となった。その過程の中で、それを喜ぶ自分達だけでなく、他の生き物への好奇心にまで広がり、保護者に表現したいという、科学する心を家庭との繋がりへの広がりが見えた。

《考察》なかなか、雨が降らない中、子ども達の興味関心が薄れないように、話し合いや写真掲示をすることで、新しく自分達が空に対して傘を作るという「やってみよう」という試みが生まれた。そこから、科学する心の循環が生まれた。さらに、せっかく作ったものを人に披露したい気持ちもあったため、普通の傘を持ち出して、雨の中散歩の活動を行うと、新しく素材に当たる雨の「音」に対する気づきも生まれ、音に対する科学する心の循環に繋がっている。常に、雨の中でも楽しさを感じるものは自分達だけではなく、他の生き物もいることについても、話し合い活動が続く中、生まれてきたと考えられる。

自分だけのオリジナルの傘は、こころまつりで保護者の方に見てもらいたいという期待にも繋がり、さらにその過程の中で知った、音のこと、生き物のことも好奇心を持って知ったこと全てを、こころまつりで伝えたいという科学する心の循環で生まれたことを、家庭へと繋げようとする子ども達発の試みに繋がったと考えられる。

《保育者の科学する心》週末に雨が降ることが多く、幼稚園で傘をさして散歩をするという活動がなかなか実現しなかった。保育者の本音では、傘を作りたいと子ども達が言ってくれたが、雨の中で散歩をしてからの方がイメージが沸きやすいのではないのか？と感じていた。しかし自然は変えられず、なかなか雨が降らないことで作った傘を空に見せるという子ども達の発想に繋がった。子どものファンタジーに寄り添って、子どもの科学する心の循環に身を委ねることも保育者の科学する心の１つになると思われた。また、その循環の中で生まれる、子ども達が人に伝えたいという思いを、家庭との繋がりにまで広げることも、子どもと共に育まれる保育者の科学する心になると考えられる。

事例５　◎3 歳児・感触遊びから広がる活動　～水溜りを触って感じたこと（令和６年１月～）

　朝から雨が降っていた。

保育者「今日は雨が降っているけど何をして遊ぶ？」

Ｙ児「散歩をしたい」

Ｓ児「カッパを着たい」

Ａやってみる

との声が上がった。どうやら、家庭では雨の日にはカッパを着ているらしく、園でもカッパが着たいとのことであった。しかしカッパは園には無いことを伝え、どうするか尋ねたところ、

Ｙ児「家にはあるけど…」

Ｓ児「じゃあ作ろうよ！」

とのことだった。そして急遽カッパを製作することになり、雨に濡れても大丈夫なビニール袋に好きな絵を描いて作成した。早速カッパを着て園庭に出てみると、

Ｂ不思議

Ｓ児「カッパ着ているから濡れないね！」

Ｋ児「カッパに雨が当たったら音がするよ！」

Ｃ気づき

Ｍ児「傘がないから楽ちん」

などと友達同士で対話をしながら楽しむ様子があった。傘を持って散歩をするよりも動きやすかったようで子ども達の行動範囲は広がり、より園庭のものを観察しているように思えた。

　部屋に帰ってから、子ども達は思い思いに感想を話し、

Ｍ児「カッパを着ると寒くない」

Ｈ児「傘の時よりも楽しい」

Ｄ好奇心

などという声が上がり「またカッパを着て散歩をしたい」という気持ちになった。

　雨上がりの園庭に水溜りを発見してから登園してきた子どもが、水溜りを触りに行きたいとのことで水溜り遊びをした。水溜りのドロドロの土を触って「スライムみたい！」と楽しむ姿があり、部屋に帰ってからＳ児が「久しぶりにスライム作りをしたい」と発言したことから部屋に帰ってスライム遊びをした。一学期はよくスライムを作って遊んでいたので、久しぶりだったこともあり長時間集中して遊んでいた。

Ａやってみる　Ｂ不思議

　後日、てづくりまつり（作品展）についての話し合い。てづくりまつりという今まで製作してきた作品を保護者の方など見てもらう行事に向けて、自分達の作品の何を部屋に飾りたいかを話し合った。

Ｓ児「傘は絶対に飾りたい」

Ｍ児「傘を飾るならカッパも飾らないといけない」

との声も上がった。すると、

Ｙ児「水溜りが足りない」

保育者「水溜り、どうやって作ろう？」

家庭との繋がり

写真 16　カッパづくりをする子ども達

写真 17　カッパを着て園内の散歩をする子ども達

写真 18　園内の水溜まりで遊ぶ子ども達

（保護者からの声）
水たまりがいるって家でも話していました。スライムで作るのは？って自分が皆に言ったと言っていました」
「幼稚園の水たまりは、透明じ

Ｙ児「スライムで作るのはどう？」

子ども達の中で、傘、カッパ、水溜りはセットのようで、どのようにして作れば良いか聞いてみたところ「スライムで作るのはどうか？」との意見が出て感触遊びから活動が広がった。子ども達の中で、自分の経験から水溜まり＝茶色のイメージだったようでスライムで水溜りを作るのに、絵の具を何回も混ぜ合わせて

Ｔ児「もっと黒いから黒の絵の具を足そう」

Ｙ児「もっと茶色いかな？何色を足す？」

Ｃ気づき

と友達と言い合いながら、スライムで水溜りを作ることを楽しんでいた。保育者が想像していた以上に水溜りを再現した。

このような活動の過程については、てづくりまつり前に、配信動画で活動過程を紹介するようにしている。

令和６年２月１０日、てづくりまつり当日は自分達の作った傘やカッパも飾り、実際に手に取ってもらえるような飾り方を工夫したり、スライムの水溜まりを再現した。多くの保護者の方にも、傘、カッパ、水たまりも手に取ったり、触ってもらうように子ども達が紹介する姿が見られた。

保護者「作った傘は持って帰るの？」

子ども「傘はまだ使うからまだ置いておく」

てづくりまつり後、自由あそびや、表現あそびの際に傘で遊んでおり、子ども達と話し合って修了式前日に持って帰ることに決まった。子ども達の中で傘が１番大事だったと思われる。

（保護者からの声）

てづくりまつりについて、「普段から〇〇作ったと教えてくれていたので、楽しみにしていました」

「祖父母はこころまつりを見ていなかったけど、何で雨が好きなのかわかったと言っていた」

「事前に作品の動画を 30 回くらいみて、子どもが説明してくれた」

「泥クッキーは砂にボンド混ぜてるんやで！と、作り方を教えてくれました」

ゃなくて、茶色ばっかりやで！と教えてくれました」

「部屋で傘をもって写真撮れるところがあると教えてくれました」

写真 19　水溜りをスライムで表現しようとする姿

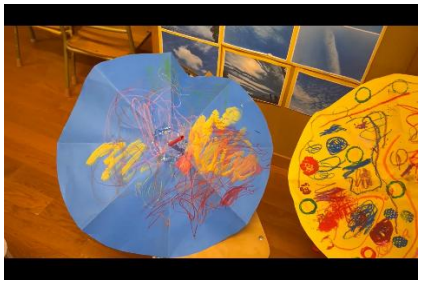


写真 20　てづくりまつりで展示した、子どもの撮影した雲の写真と傘

写真 21　てづくりまつりの様子

《子どもの科学する心》家庭ではカッパを着ていることから、園でもカッパを着て散歩をしてみたい気持ちが生まれる。カッパが無いことで、できないことになるのではなく、無いなら作ろうという目標に向かって行動しようという「やってみよう」に繋がっている。カッパを身に着けて、全身で体感する中で、水たまりでの遊びから、「不思議」「気づき」「好奇心」といった科学する心の循環が生まれている。その体験から生まれたことを、友達と対話をしながらこだわって、普段から楽しんでいるスライムづくりを利用して、水溜りを作ろうとする姿があり、雨の活動を通して生まれた。子ども達の活動は、傘、音、カッパ、水たまりといったことを、保護者にまで体感してもらおうという、科学する心の循環を作品に繋げる試みにまで広がっている。

《考察》カッパを着たという自分達のやりたいこと（目標）が明確であり、カッパがない（課題)、その課題を解決しようとする、「やってみよう」とする気持ちが生まれている。家庭での体験を園でもやってみよう、そのためには無いなら作ろう！という意欲が伺え、科学する心の循環の原動力になっているように思われる。

同じようなことは、水溜りをスライムで表現しようとする姿にも伺える。スライムで感触遊びをしたことから、水たまり遊びと結び付け、それを保護者にも体験してもらおうという意欲をもとに科学する心のサイクルが生まれていると思われる。活動過程に関する事前動画配信も、家庭との繋がりを促す手立ての１つとなり、てづくりまつりは日頃の子ども達の保育で作ってきた作品を飾り、保護者（祖父母を含む）や他の学年のお友達にも伝える絶好の機会となる。こころまつりと同様に保育の延長線上にあるものであるが、傘、カッパ、水溜りと子ども達の中で活動の中にも繋がりがあるように思われた。

《保育者の科学する心》無いなら作る？と保育者から声をかける前に子ども達からやってみようという提案が生まれるようになった。子ども達の今までのやりたいことをやってみることを継続してきたからこそ生まれてきたと考えられる。さらに、家庭での体験も関係しているようにも思われる。水溜まりについてもどうやって作ればいいのかということを、子ども達の柔軟な考え方で、スライムで作ろうという柔軟な考えを気づくことも保育者の科学する心に繋がると思われる。家庭との繋がりを、子どもの体験を通して、家庭から園、園から家庭への架け橋になるようにしていくことが、保育者の科学する心になると考える。

本論文のまとめと課題

①本実践から見られた科学する心の循環

子どもにとって雨をきっかけに、「やってみよう」、「不思議」、「気づき」、「好奇心」という科学する心の循環が生まれ、経験の繋がりが、多様な体験をさらに生み出すこととなった。子ども達にとって、自分で作った傘が年度が終わるまで、常にこの循環を生み出す媒体にもなっていた。また、その中には、年上の子どもとの関わりから得た方法を真似たり、話し合い活動で友達と共に育んだものが大きい。その原動力には、図３のように家庭との繋がりが大きな役割を果たしていると考えられる。

②科学する心の循環を支える家庭との繋がり

家庭との繋がりについては、家庭で共に過ごす保護者の役割が大きい。園での取り組みについて、この科学する心の循環が、子どもの言葉や行動で家庭でも表れて、保護者によく伝わったと考えられる。その伝わった内容が、保護者に保育者の言葉として伝わっている。その言葉の中には、家庭での様子から、単なる園内の話で終わるのではなく、実際に家庭が園で行っている子どもの科学する心の循環をさらに広げるような活動を行っていることが伺えた。この園と家庭が同じ方向に向かえるように、科学する心を共に循環できるように保育者自身も科学する心をもつ必要があることが分かった。

③子どもから働きかける科学する心の循環の家庭との繋がり

家庭との繋がりについては、２学期後半以降、子ども自身が園での取り組みについて、他の人へ伝えようという思いが強くなった。日々の保育活動の中で決められたことをただするのではなく、自分達の楽しい活動を無意識に考えて、人に伝えていこうとする主体性が育まれていた。自分の存在が認められていると実感しながら、安心感を土台として自己表現をしていく子ども達の姿から、科学する心の循環を人を巻き込み広げていこうとする原動力にもなっていた。一学期からの子ども達の体験を通して、保育者は「雨が降ったから片付けよう」という考えであったが、そのような考え方では保育者自身の科学する心も育まれない。子ども達の「面白そう」「やって

みよう」という発想から、保育者の先入観を取り払うことができ、保育の活動の幅や考え方が変えいく営みが、子どもと保育者が科学する心の循環を保護者と共に繋げていくことになりうると考えらえる。科学する心の循環のきっかけは、子ども達の自由な発想、純粋に感じたことを実現しようとすることこそが、子どもならではの科学する心の原点となった。

④課題

本実践では、教育時間における３歳児の活動と家庭との繋がりを主に見て来た。この過程については、今後４歳児においてどのようになっていくのかも追っていきたい。また、３歳児の友達との関係が広がる中、異年齢でのユニット活動との関連については、タブレット端末を使う方法について真似たことしか、触れていない。今後は、ユニット活動や預かり保育との繋がりの中で育まれるものについても注目していきたい。最後に３歳児において、地域との繋がりにまでは注目できていない、５歳では園内外の人達と共に科学する心がどのように育まれるかみることができたが、３歳児、４歳児でもどのような活動ができるか注目していきたい。

図３ 本実践からみえた３歳児の科学する心を支える保護者との繋がり

研究代表者名　　屋嘉部　涼加
執筆者名　　屋嘉部　涼加　　西村　亜実　　志方　智恵子　　亀山　秀郎